物流危機「2024年問題」まであと1年

Wedge ウェッジ

Guiding Japan forward

MAY 2023
Vol.35 No.5
5

2023年4月20日発行・発売（毎月1回20日発行・発売）第35巻第5号（通巻409号）平成元年8月31日第3種郵便物承認

Special Report

法規制だけでは解決できない

最後の暗黒大陸・物流「2024年問題」に光を灯せ

Wedge Opinion
防衛力強化に進む日本
世界に向けてすべきこと

Wedge Special Opinion
バルト三国から日本へ
大使が語るロシアの脅威

Wedge Report
メタバースに黄信号
「マルチバース」の現在地

JPR

パレットを運ぶ日本パレットレンタルのフォークリフト。回収されたパレットは再び供給される

PART 4

荷役の負荷軽減へ 今度こそパレットの本格普及を

官民をあげてパレットの利用促進、規格の標準化に向けた議論が進んでいる。パレット利用の最前線の一つである、東京の大田市場を訪ねた。

文・**編集部**（友森敏雄）

トラックの荷役時間・効率を劇的に上げる効果があるとされるパレット。パレット利用の促進、一貫輸送において1・1メートル×1・1メートルの大きさでプラスチック製の「T11」と呼ばれる規格への標準化を目指し、官民挙げた議論が行われている。小誌記者は最前線の現場である東京都中央卸売市場大田市場に向かった。

出迎えてくれたのは、東京青果（東京都大田区）商品センター部長の庄内弘志さんと経営戦略室課長の中村岩生さん。そして日本パレットレンタル（JPR）で農産物を担当する菅家隆史さん。「東一」の名で知られる青果卸売最大手の東京青果とレンタルパレット最大手のJPRが協力してパレット循環利用の促進に取り組んでいる。

現在、産地から運ばれる青果物は「雑パレ」と呼ばれる所有者不明の木製パレットを使用したものが大半を占める。その出元は、輸入バナナや電子部品などさまざま。雑パレがあるならレンタルパレットは不要ではと思ってしまうが、「雑パレはトラックの帰り便に積む必要があり、長距離トラックは別の荷物を積んで帰ることが多いため

邪魔になります。また、近年は世界各国で環境規制が強化されているため、新規の木製パレットが海外から入ってこなくなっています」と庄内さん。「雑パレ」がなくなり荷物が運べないという状況になる前に、レンタルパレットを利用して、パレットをきちんと循環させるという狙いもある。

しかし、大田市場に向けて出荷する産地は5000カ所を超える。全ての産地に同じフォーマットのパレットで配送してもらうのは並大抵のことではない。産地によっては、独自のパレットを作るところもある。そこには、青果物ならではの理由もある。

ジャガイモのように段ボール箱の中にバラ入れすることができる産物は、T11のような標準パレットに箱の大きさを変更しやすい。一方で、リンゴやトマトのように詰め数の規格が決まっており、箱の大きさを変えにくい商品をパレット積みすると、積み荷の隙間が大きくなり、トラックの積載効率が落ちてしまうという問題もある。実際、リンゴだけで100以上の品種×等階級の組み合わせがあり、規格の見直しが難しい。結果的にこのような青果物は、「ベタ積み」と呼ばれるパレットなしで配送されることになる。

さらに、中村さんによれば「青果物を選別・包装など出荷するための選果場の規格自体が、現状の段ボール箱の大きさに合わせているという問題もあるため、そこから変えるとなると大規模な投資が必要になります」という。確かにそのような〝攻め〟の投資ができる産地ばかりではない。

「最終的な目標は、仲卸から小売業の物流センターまで、つまり発荷主から着荷主まで同じパレットで配送する一貫パレチゼーションです」と庄内さんが話すように、大田市場では現在、東京青果が積み荷を積み替えるなどして、レンタルパレットを回収して保管し、それをJPRが回収するという段階にとどまっており、積み替え業務の負荷が課題となっている。川下まで利用を広げるには、使用済みのパレットの保管場所が必要になる。物流センター側でも、場所を確保するのは容易ではないが、「いま、最も注力しているのが回収協力の要請です」とJPRの菅家さんは力を込める。

実際、東京青果の卸売場も、2層化が進められている。以前は、都内の別の市場に運ばれていた青果物が、物流の効率化のために大田市場に集中するようになり、青果物の置き場不足になったためだ。東京青果にとっても、パレット保管の場所確保は大きな課題となっている。

パレット輸送の効果

（出所）経済産業省資料よりウェッジ作成

	手荷役	フォークリフト
荷役方法		
各荷役方法の割合	35%	38%
効率性（パレット1台相当の荷卸しに要する時間）	6分24秒	約75%削減 → 1分35秒

流出防止と回収率を上げる

加えて、「雑パレ」が流通しているように「パレットは誰かの所有物である」という意識が低いため、流出してしまうことが少なくない。東京青果では、パレットを勝手に持ち出すことができないように保管場所は、柵とカラーコーンで囲っている。「結局、レンタルパレットを回収できなければ、レンタルしている産地に迷惑をかけることになります。それを避けるために全国の卸売会社でもレンタルパレットの積み荷を積み替えるなどの努力をしており、回収率も産地が安心してレンタルできる水準まで向上してきました」と庄内さん。

全体でいえば、まだ数%のレンタルパレット利用ではあるが、遠隔地の産地を中心に着実に利用は増えているという。「ベタ積み」で荷役に時間がかかれば、2024年問題など、一連のトラックドライバーの働き方改革に抵触して、モノを運べなくなるという危機感があるからだ。

JPR広報部の那須正志さんによれば、「一貫輸送において『T11』型を標準規格にすると決められたのは1970年にさかのぼります」。しかし、50年以上たった今でも標準化は進んでいない。まさに「古くて新しい問題」ではあるが、「2024年問題」を契機にパレットの普及と標準化を進めたいところだ。 W

大田市場・東京青果の2層卸売場。色とりどりの段ボール箱が並び、美しくも見える